

〔翻 訳〕

ハンス・ヴィスリング 『ナルシズムと幻想的存在形式』(1)

六 浦 英 文 訳

目 標 設 定

本研究は三重の目標を追求する。すなわち、
 ——トーマス・マンの全作品のなかで分析された、あるいは発見された根本的な経験と葛藤を浮き彫りにすること。
 ——これらを文学史的・社会史的に関連づけること。
 ——個人的葛藤と普遍的葛藤を克服しようとするトーマス・マンの精神的、芸術的戦略を認識すること、である。

トーマス・マンが書き記したすべては、分析と判断、批評、自己自身の祝典に奉仕している——つねに、「問題をはらんだ自我」(das „problematische Ich“)についての解明が、時代の問題性の解明にもつながりえるという意味において。マンの作品はナルシスのような人間の苦悩と勝利を扱っている。

ショーペンハウアーの苦悩の哲学とニーチェの暴露心理学の光に照らして見れば、結局のところ心理分析の助けを借りるならば、自己認識はプロテスタント的な弁明衝動の圧力下で可能となる。——トーマス・マンの生を成り立たせていた途方もない苦悩の圧力を目の当たりにすると、「プロテスタンティズム」と啓蒙主義は英雄の特徴を帯びていると想定することができる。

自己祝祭は、運命にしたがって自己主張し、十字架と死と墓穴の領域に打ち勝とうとする根本的に幸福であるという感情において可能である。自己祝祭は、幸運の神ヘルメスとの遊戯的で厳粛な自己同一性という形で、ゲーテとトルストイに依拠して促進されるが、ヘルメスという名前には、トーマス・マンが「ギリシア精神」として実存的に経験した一切が要約されている。

その際、作品と人物とは、広範囲にわたって同一である。作品は、遊びでありフィクションであるだけでなく、きわめて具体的な意味で、苦悩の圧力を克服することに奉仕している。逆に、生はその偉大さのためにまさしく作品とその神話的な模範にもとづいて生きられることがしばしばである。戦略は多くある。われわれはナルシシスト的体質が現実による侮辱に反応する様を認識しようとする(それは単にほかの文士からの論争的攻撃、政

治的威嚇，愚行 (stupidité) 一般の攻撃にかかわるのかもしれない)。さらに，ナルシシストが，いかなる手段を用いて自己のバランスを，いやそれどころか，自己の万能感情を保持し，再獲得し，安定化しようとするかが認識されるべきであろう (アイロニカルな防御によって，現実の幻想化によって，「表現のもたらすさまざまな快樂」(VIII, 290)，結局フモール (Humor) の助けを借りて)。その際，いかなる意味が言語にふさわしいか (言語の魔術，言語の魔法)，ナルシシストが，言語作品の力を借りて孤独から社会的なものの領域へ脱出することにどこまで成功しているか (引用のような包括的観念連合の構造，作品の主題設定) が，認識されるべきであろう。

さまざまな理由から，『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』 *Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull* が出発点として浮かび上がってきた。

1. 1905年以来計画されていたが，しかしその最も深い根は『ブデンブローク家の人々』 *Buddenbrooks* 以前の時代にさかのぼり，数十年の中断ののちに，1950年代に完結するので，この『告白』という作品がトーマス・マンの全作品の枠を形成し，したがってまたこの研究にも一つの枠を形成することができる。

2. 『告白』はテーマの上でもモチーフの上でもトーマス・マンの創作の中心部に通じている。『告白』は意志と表象としての自己の世界を表している。『告白』は，芸術家の「非現実的幻想的な存在形式」(XI, 122) を問い，自己の現存在の役割性を分析することによって，アイデンティティの問題を投げかける。生に対する不安と生への意志との間，世界蔑視と世界憧憬との間の緊張から『告白』は幸運のモチーフを展開し，『幸福への意志』(VIII, 41) を幸福の可能性，幸福性への信仰に移行し，反抗的で硬直した選良意識を融和的なものに変容させ，仮象の幸福と幸福の仮象との境界の周りをいたずらっぽく戯れる。

3. 『告白』は，トーマス・マンの精神史的伝統と文学史的伝統を表している。すなわちまず第一に，ショーペンハウアーの意志と表象の教義による自己確認，ニーチェの生と精神との二元性による自己確認，すでにニーチェによって記述された，最優先的な方向付けの喪失による不安感，次に，偉大な模範的人物，とりわけゲーテ——『告白』はゲーテ模倣 (Goethe imitation) の全段階をたどり，意図的な人生形成という魅力的な演劇を提供している——に依拠して自己発見を貫く試み。

4. 告白小説の初期の部分と後期の部分との比較は，神話と心理学とのトーマス・マンの関係における変化も形成している。フェーリクス・クルルは，はじめはニーチェの意味で芸術家的気質を持った子供として構想されていて，童話の幸運児に似ているが，のちには近代的悪漢の衣装をまとうて再び特殊性を表すヘルメスの子になる——これはトーマス・マンのフロイト読書体験，ケレーニー読書体験なしには考えられない変化である。

5. トーマス・マンのナルシシズムの素質について，またそれに伴うマンの全作品における根本的なナルシシズムの特徴について，特に『告白』が解明をしてくれる。自己観察，自己愛と自己憎悪との間の戯れ。外部世界による傷つきやすさ，外部世界からの防御，外部世界に打ち勝ちそれを克服しようとするもろもろの試み。トーマス・マンの作品中でま

さに『クルル』ほどうまくそれが観察できるものはない。

6. この長篇小説は、マンの初期および後期の部分において、非政治的なふるまいをする作品が歴史的な文脈といかに深くかかわっているか、また、個人心理学の一切を超えて、より正確に言えば、それを超えて社会史的に重要なものとなるかを明らかにする。『告白』はトーマス・マンの20世紀の初期と中期における適応と批判とユートピアの可能性を獲得する。『告白』は、クルルが現実とかかわったり、現実から逃げたり、現実に異議を申し立てるものを示す。その背後で、トーマス・マン自身の留保すべき関係、政治における(in politicis)不確定要素、すなわち、未決定状態と決定論、保守主義と進歩信仰、画一主義とユートピアの局外性との間の途切れることのない交換遊戯が明らかになる。

7. 結局、『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』は、外部的な理由からも、探究の対象を提供している。後期の『クルル』にも初期の『クルル』にもほとんどすべての覚書と素材が含まれている。数冊の初期のノートから見ると、原稿も完璧に存在する。したがって初期のトーマス・マンの研究方法も後期のトーマス・マンの研究方法と同様に個々の点にいたるまでたどることが可能である。参考文書によって読者はそれに関する概念をつかむことができるはずである。

この研究論文の概略は、1968年、エッセイ「幸運の子、ヘルメスの子フェーリクス・クルルの奇妙な経歴」*Die merkwürdige Lebensbahn des Glücks- und Hermeskindes Felix Krull*で初めて書かれた。この概要を立証するために、個別研究では不十分であることが明らかになった。とりわけ1901年と1914年の間の期間が研究されることがあまりにも少なかった。『クルル』が生まれる『マーヤ』複合体について当時誰が知り得たであろうか。それに続いて『精神と芸術』*Geist und Kunst*の覚書の編集が行われた。つまり、それが初期の『クルル』と『ヴェニスに死す』*Der Tod in Venedig*のための理論的基盤を形成しているからだ。これらすべての予備研究は、1967年に、『トーマス・マン研究』*Thomas-Mann-Studien*の第1巻で提示された。兄ハインリヒとのトーマス・マンの対決がこの長篇小説(と全作品)の構想にどれだけ大きな影響を及ぼしているか、1968年に、マン兄弟の『往復書簡』*Briefwechsel*の序論で示された——いくつかの政治的局面もそこで明らかにされている。「トーマス・マンにおける『神話と心理学』」„*Mythos und Psychologie*“ bei *Thomas Mann* (1969年)についての論文は後期の『クルル』に狙いを定めている。講演「クックク教授とは誰か」*Wer war Professor Kuckuck?* (1975年)と「トーマス・マンにおけるゲーテ模倣」*Thomas Manns Goethe-Nachfolge* (1977年)についての講演がそれに続いた。この研究を発展させるために、『クルル』の成立史も、この長篇小説の続篇のための計画についても個別研究で書いた。『クルル』とその他の作品についてのトーマス・マンの自己注釈は現在『作家の自作品注釈』*Dichter über ihre Dichtungen* シリーズのトーマス・マンの部3巻本で公開されている。

マンフレート・ディルクス (Oldenburg), ヘンリー・ハットフィールド (Harvard University), エーリヒ・ヘラー (Northwestern University), ペーター・ヘラー (New York State University), クラウス・ヘルムスドルフ (Berlin), ヴィクトーア・ランゲ

(Princeton), ヘルベルト・レーネルト (University of California/Irvine), ヘルムート・コープマン (Augsburg), ヘルマン・クルツケ (Würzburg), T. J. リード (Oxford), ハンス・ヨーアヒム・ザントベルク (Bergen), ハンス・ルードルフ・ヴァジエ (Smith College) が研究と対話を通じて多くの刺激を与えてくれたことに謝意を表します。エーディット・ハッソルト=エグリ, ロースマリー・ヒンターマン, テレーゼ・シュヴァイツァーにはテキストの編集と点検において助力していただきました。アルフレート・ファルク (Frauenfeld) にはこの巻の印刷作業を入念に準備していただきました。

1980年1月1日 チューリヒにて

ハンス・ヴァイスリング

初期について

導入

『大公殿下』*Königliche Hoheit* は1909年2月13日に書き終えられた¹⁾。次にはどんな作品が続くことになるのだろうか。数年前からいくつかの作品の構想が浮かんでいた。

最も古い計画は、1901年にさかのぼる短篇小説『恋人たち』*Die Geliebten* というプロジェクトであった。これは1903年の末から『マヤ』*Maja* という題名を持つ社会小説という構想に拡大されていた²⁾。この短篇小説は、トーマス・マンの1902年3月14日のヒルデ・ディーステル宛ての書簡 (Br. I, 31) で問い合わせていた『恋人たち』の「事実の骨格、話の骨格」の上に建てられたかもしれない。すなわち、市電の中で愛する男を射殺する失望した婦人の物語の話である。トーマス・マンは、苦悩する「世界愛」(Weltliebe) と「生へのあこがれ」³⁾ (Lebenssehnsucht) というテーマ設定を、例の数年間にも、『トーニオ・クレーガー』*Tonio Kröger* の時期にも、習作『飢えた人々』*Die Hungerunden* と『ある幸福』*Ein Glück* でも扱っていた。1904年以来、マンは『恋人たち』を長篇小説に拡大することを吟味したように思われる。トーマス・マンが1904年から1908年にかけて作成した副次的ストーリーと副次的人物に関する覚書がこのことを証明している⁴⁾。これらの計画のうち最も有名なものは、無理やりに靈感を手に入れるために第二のファウスト博士として悪魔に身を捧げる、梅毒に感染した芸術家を扱うことになっていたかもしれない⁵⁾。社会小説を書くひそかな誘因がそこにあった。すなわち、1903年12月、トーマス・マンは、兄がさっと走り書きした通俗的モデル小説『恋狩り』*Die Jagd nach Leibe* を読んでいたからだ。これを読んでマンは「途方に暮れて」(ratlos) しまった⁶⁾。この駄作には威厳、哲学的理念が欠けていたからだ。現代の社会小説はいかに書かれるべきか、マンは兄に示すべきだろうか。マンは小説の中で理念の陰の下で「人間のさまざまな運命」(VIII, 450) を集めようとしていたが、その理念とは、ショーペンハウアーの厭世主義の色彩を帯びた「生の幻想的性格」(IX, 562) に対する洞察かもしれない。しかし、1902年の筋の骨格が長篇小説を担うことができるだろうか。この場合にも明らかに筋に問題があった。1906年の初めにはすでに、マンはほかの理由からこの計画を一時的に完全に放棄したように思える。1906年1月17日に、マンはこう書いている。「ぼくは現代の大都市小説のために、この数年間たくさんの注目すべき素材を集めましたし、非常に多くのことを体験し、苦しん

1) [原注] Notizbuch (覚書) 9, S. 63.

2) [原注] これについておよび以下については Hans Wysling: *Zu Thomas Manns <Maya>-Projekt* (TMS I, 23-47) を参照せよ。

3) [原注] Notizbuch 7, S. 51.

4) [原注] Hans Wysling: *Thomas Mann. Notizen* [...]. Beihefte zum <Euphorion>, Nr. 5. Heidelberg: Winter 1973.

5) [原注] Notizbuch 7, S. 138, 155 のなかの書き込みは1904年末から1905年と推定してもよいであろう。

6) [原注] Br. I, 41.

だりしましたので、かなりの作品になりうるくらいです。しかし、二・三年、なにかある現代小説の重荷を引きずる忍耐も謙虚さ（失礼！）もあるとは思えません。」当時より以上にマンを魅了していたのは偉大さの問題であった。その問題の解明にいざなったのは『フリードリヒ』*Friedrich* 素材であった。まやかしとしての世界、世界の舞台（*theatrum mundi*）としてのミュンヘンの社交界を描こうという考えを、トーマス・マンは『大公殿下』執筆中にも放棄しなかったように思われる。この長篇小説の息子と考えられる1908年の『逸話』⁷⁾ *Anekdote* のなかで、トーマス・マンはマーヤのテーマを再び取り上げる（VIII, 411）。「私たちはマーヤのヴェールとその玉虫色に輝いて人目をくらます働きについて、仏陀が「渇き」⁸⁾（*das Dürsten*）」と呼んだものについて、憧れの甘美さについて、認識の苦みについて、大きな誘惑と大きな欺瞞について話した。「憧れの屈辱」（*Blamage der Sehnsucht*）という言葉が出た。「あらゆる憧れの目標は世界の克服である」という哲学的命題が立てられていた。『逸話』はマーヤのテーマの試作として、あるいはそのテーマからの別れと見なされるべきであろうか。トーマス・マンは1908年に長篇小説の構想そのものを断念したように思える。『マーヤ』の最後の覚書がこの時期に書かれている⁹⁾。『ヴェニスに死す』のなかで、トーマス・マンのその他の作品と並んで、長篇小説がグスタフ・フォン・アッシュェンバハの作品の列に加えられている。『恋人たち』のあらすじは『ファウストゥス博士』*Doktor Faustus* のなかで初めて利用される。これに反して、マーヤの普遍的なテーマ設定は一生トーマス・マンの心を奪ってきた。このテーマは『クルル』と『欺かれた女』*Die Betrogene* のなかで中心的なものであるが、その他の作品で、なかんづくエッセイとして『非政治的人間の考察』*Betrachtungen eines Unpolitischen*（XII, 109）で、論文『ショーペンハウアー』*Schopenhauer*（IX, 550 ff.）で、『シラー詩論』*Versuch über Schiller*（IX, 927）のなかで取り上げられている。

さて、マンは『大公殿下』を書き終えたのち、最初に『フリードリヒ』長篇小説、あるいは『詐欺師』長篇小説に取り掛かることになるのだろうか。これら二つの計画に関する最初の覚書は1905年にまでさかのぼる¹⁰⁾。『フリードリヒ』は1906年にはすでに「大公短篇小説」を押しつける勢いであった。どうして今度は架空の小国の大公についての喜劇の後に王様の長篇小説が続くことにならないのだろうか。トーマス・マンが叙述することに魅せられたのは、偉大な歴史的人物のなかに孤独のパトスと権力のパトスが結合されていることであった。クーグラー（Kugler）の『フリードリヒ大王物語』のなかに挿入された、写字台の傍の若きフリードリヒの孤独を描いたメンツェルのスケッチがマンを魅了し

7) [原注] Notizbuch 9, S. 14 を参照せよ；*Notizen*, S. 25f. のなかにコピーされている。

8) [原注] Notizbuch 9, S. 34-36 を参照せよ；*Notizen*, S. 35f. のなかにコピーされている。

9) [原注] Notizbuch 9, S. 50f.; *Notizen*, S. 44f. を参照せよ。

10) [原注] 両作品についての最初の覚書は、Notizbuch 7, S. 158 のなかに同時に現れている。それ以外には HTML, S. 43f., 47-50, 52, 57, 85, 116（『フリードリヒ』について）、および Hans Wysling: *Archivalisches Gewühle. Zur Entstehungsgeschichte der «Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull»*（TMS I, 234-257）を参照せよ。

ていた。孤独な人間がいかにして行動することができたのか。距離の全パトスを超えて、いかにして大政治に介入することができたのか。いかにして審美主義的孤立から歴史への道を見出すことができたのか。遊戯的審美家から統治する支配者への変化はいかにして可能であったのか。精神と権力のいかがわしく扱いにくい結合、つまり、『トーニオ・クレーガー』のなかでフィリップⅡ世が奇妙な人物になったとき、そして『フィオレンツァ』*Fiorenza* のなかでも、すでにこの結合がトーマス・マンの想像をかきたてていたのではなかったであろうか。そこにはすでに、仕事を続けさせる素材があったことは疑いの余地がない。しかしもしかすると『大公殿下』とのモチーフの関係があまりにも密接であったのかも入れない。それに加えて、マンがこの計画の実現に取り掛かる前に、まだ厄介な歴史研究が必要であった¹¹⁾。

ことによると『詐欺師』の素材を先取りすることのほうがより簡単であったのかもしれない。芸術家という形だけ代表者である存在を、宮廷的・貴族的なものにあるいは犯罪的・高等詐欺師的なものに戯画化することは可能である、とマンは『トーニオ・クレーゲル』のなかですでに暗示していた(VIII, 297f.)。このプロジェクトと『大公殿下』とが、幸運のモチーフと仮象の問題によって結合されていた。詐欺師と同様に大公も自己の役割の幻想性を自覚している。両者は代表し、役割を演じる。両者は役割の担い手、すなわち役者である。しかし、クラウス・ハインリヒが立場上一定の役割を強いられるのに対して、詐欺師は自発的に役割を演じる。クラウス・ハインリヒの純然たる受動性に、詐欺師の熟練が対立している。この詐欺師は仮象を演じ、回を重ねるたびに法的根拠なしに貴族の称号を利用し魅惑的な力を試す。詐欺師は欺瞞と虚偽を手段として効果を発揮しようと試みる。この場合、歴史の研究を読破する必要はない。変装道具、ことによると「事実と作り話の骨格」も、1905年に出版されて、すぐにトーマス・マンの注意を喚起したマノレスクの『回想録』から取り入れられたのかもしれない。この素材は、犯罪者の人物の品位剥奪という観点から眺めるときわめて厄介なものであるが、喜劇的なものへの温和化へと方向転換された。

しかし、さらにもう一つの計画があった。1908年にすでに、『大公殿下』の終了以前にも、『文学的なものについての論文』¹²⁾のための素材を集め始めていた。これは『精神と芸

11) [原注]『フリードリヒ』素材は、結局、エッセイ『フリードリヒと大同盟』に名をとどめている。トーマス・マンは、1906年と1912年の間に、チューリヒ文書館所蔵の特別な Notizbuch のなかに50ページの抜粋と覚書を作成した。1912年1月20日にもマンはルートヴィヒ・エーヴェルス(『魔法使い』*Der Zauberer* 821ページ)に宛ててこう書いている。「この偉大で、厳格で、感動的な人生への愛は君が知っている以上に親密なものです。この愛は数年前からわが魂の人生の一部を形成していて、もう数年、それに完全に全力を挙げて没頭することができるように希望しています。そう、これは内緒です！ 私はこれをAからZまで語りたいたいです、そうなれば私としては墓穴に赴いてもいいと思います。ことによると40でそうなるかもしれませんが、それでもその代償としては妥当な年齢といえるかもしれません。」

12) [原注] Hans Wysling: «Geist und Kunst». *Thomas Manns Notizen zu einem «Literatur-Essay»* (TMS I, 123-233) を参照せよ。

術』というタイトルを冠することになっていて、作家としての立場を規定するものとして考えられていたことは明白であった。このなかで、トーマス・マンは、禁欲的・道徳的文士の領域と役者の模倣的芸術家の領域との境界をはっきりさせようと思った。また、マンは作家と詩人との間の関係をより正確に規定しようとした。自己探求と時代批判は、普遍的な「現代批判」に増大することになった。これはニーチェにならってすでにヘルマン・バング、トルストイ、ルブリンスキーによって試みられていた¹³⁾。

さて一番先には何が来るのであろうか。優先順位は『大公殿下』終了後にすぐに生まれたように思える。1909年3月25日にトーマス・マンはハインリヒ・マンあての手紙にこう書いている。「ついでに言いますと、ほくはまあこんな風に持ちこたえていますし、理念的に『大公殿下』に続くことになるいくつかの作品を準備しています。つまり、さまざまな時代批判的なものを含むエッセイと、『大公殿下』に理念的に隣接していますが雰囲気異なる短篇小説で、<18世紀>的なものをすでに含んでいると思います。」これは『精神と芸術』、『詐欺師』長篇小説、『フリードリヒ』長篇小説とのみ関連付けることができる。このために、当時トーマス・マンは、詐欺師長篇小説にも同様に役に立てる18世紀の自伝、伝記、告白書をたくさん読んでいた。1909年11月2日に公開された『ザレ新聞』あての書簡は、同じ順序を記録している。「私は目下エッセイを書いています。これは『精神と芸術』というタイトルになるでしょう。更に比較的長い物語『詐欺師』にも取り組んでいます。これは私の大公についての長篇小説の一種の補完を意味するでしょう。また、計画中の歴史長篇小説についての最初の研究もしております。」

『精神と芸術』が一度も完成しなかったことは周知のとおりである。トーマス・マンは投げかけられた問題を片づけることはなかった。1913年の論文『芸術家と文士』(X, 62)の序文でマンはこう書いている。「対象が計り知れないほど大きなものになり、著者のエッセイスト的自制心が、対象を構成するまでに達しない。こうしてこの計画は形にならない覚書の塊として中断することになった。」その期間中もこの仕事は無駄にはなっていなかった。次の数十年間、トーマス・マンは『精神と芸術』についての覚書という土台へ繰り返し戻ったからである。とりわけしかし、マンは理論的には成功しなかったものを次の比較的に大きな諸作品のなかで芸術作品に仕立てようと試みた。マンは、『クルル』のなかでは芸術家のコメディアンタイプを描き、グスタフ・フォン・アッセンバハのなかでは文士の禁欲的・道徳的タイプを描いた。

したがって、1909年は準備と収集の一年であった。ほとんど顧慮されない抒情的・エッセイ風の習作『甘い眠り』¹⁴⁾ *Süßer Schlaf* が唯一の比較的大きな著作として出版された。この習作は、一見すると、『大公殿下』とも『フェーリクス・クルル』とも関係がなさそうに見える。ところがまさしくこの習作こそが『大公—短篇小説』¹⁵⁾ から『告白』長篇小

13) [原注] Hermann Bahr: *Studien zur Kritik der Moderne*. Frankfurt 1894. Leo Tolstoi: *Gegen die moderne Kunst*. Berlin 1898. Samuel Lublinski: *Die Bilanz der Moderne*. Berlin 1904.

14) [原注] 1909年5月30日付《Neue Freie Presse》Wien のなかで発表された。

15) [原注] Hans Wysling: *Die Fragmente zur «Fürsten-Novelle»*. Zur Urhandschrift der «Königlichen

説への架け橋となっているのである。ノヴァーリス、ショーペンハウアー、ヴァーグナーに満ち溢れるように、この習作は感動に打ち震える頌歌のような言葉のなかで「夜の魔法の王国」¹⁶⁾を賛美している。トーマス・マンが『ブデンプロック家の人々』のハノーの章と、『トリスタン』*Tristan*のなかですでに呼び出していたこの魔法の国は、規律、秩序、道徳性すなわち「作品への意志」(XI, 338)という昼の王国に対立している。したがってこの習作は過去の理念を再び取り上げたものではない。この習作はトーマス・マンの全作品を貫き、『告白』へも加工されることになる主題を再び取り上げている。

1910年初めに事態はそこまで進んでいた¹⁷⁾。トーマス・マンは、『精神と芸術』のプロジェクトを進めることを最終的に決断し、『クルル』のための資料収集と覚書づくりに着手した。『略伝』のなかでマンは初期『クルル』のモチーフとテーマの複合体を次のように略述している(XI, 122)。「『大公殿下』を脱稿したのち、私は『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』を書き始めていた——この腹案は一風変わったもので、言い当てた人も多かったが、マノレスクの回想録を読んで、思いついたものである。取り扱った問題は、もちろん、芸術と芸術家という主題(モチーフ)の新しい方向転換、すなわち、非現実的幻想的な存在形式の心理学であった。一方、文体の点で私を魅了したものは、手本にした回想録が荒削りな形で暗示してくれた自叙伝体の直接法で、これはこのときまで一度も試みたことがなかったのである。それから、一種の幻想的な精神的な魅力が、私の愛している伝承の一要素、すなわち、ゲーテ的な自己形成的自叙伝的なもの、貴族的告白的なものを、犯罪的なものに翻訳するというもじり文学(パロディー)的な観念から生じてきた。」したがって多種多様なものが新しい作品の着想になっている。すなわち、これはテーマ的には、非現実的幻想的な存在形式の問題であった。モチーフ的には、「芸術家の孤独の問題・仮象の問題が犯罪的なものへの変化」¹⁸⁾すること、つまり新たに芸術家を戯画化(Künstlertravestie)することが問題となっていた。文体的には、自我形式(Ichform)に関する擬態(Mimikry)と告白、隠蔽と露呈との魅惑的な交換遊戯が演じられていた。しかし、構成面では、マノレスクの回想録だけではなく、「ゲーテの『詩と真実』を含めた18世紀の偉大な自伝作品」(XIII, 147)に依拠することになっていた。——これは最初から告白長篇小説のパロディーとして考えられていた。さらに神話的基底としては、幸運の寵児というメールヒエンが提供された。これらすべてによって、新しい作品には多層性が確保された。もしかすると、この多層性によって、今回もまた、一切が問題をはらんだおのれの自我をめぐっていることが概観できるかもしれない。

Hoheit》(TMS I, 64-105)を参照せよ。

16) [原注]『トリスタンとイゾルデ』*Tristan und Isolde* 第2幕愛のデュエット。1901年3月7日付のハインリヒ・マン宛ての書簡(Br. I, 27)を参照せよ。

17) [原注] 1901年1月10日と1月11日のハインリヒ・マン宛ておよびクルト・マルテンス宛ての書簡(HTM, S. 83; Br. I, 80)を参照せよ。

18) [原注]『自分のこと』*On Myself* (TMS III, 84)。

テキスト：

Hans Wysling: *Narzissmus und illusionäre Existenzform. Zu den Bekenntnissen des Hochstaplers Felix Krull*. Bern und München: Francke Verlag 1982, S. 9-19.

付記：

トーマス・マンの作品に関する訳文は、新潮社版『トーマス・マン全集』のものを参照させていただいた。訳文中に記載されている (VIII, 290) は, Thomas Mann: *Gesammelte Werke in 13 Bänden*, Frankfurt a. M. 1960/1974 の第8巻290ページを意味する。以下同様。

なお、この訳稿は「2016年度大阪経済大学特別研究費」の成果である。